

# 最新事情

伝統校の名に恥じない、  
ビジネス意識の高い生徒に育てる

## 新潟県立新潟商業高等学校

(新潟県新潟市)

平成25年度に創立130年を迎える新潟商業高等学校。新潟市の中心部に位置する同校では、就職希望者は少ないながらも、将来、ビジネスにおいて活躍できる力の習得、意識の形成を目指し、日々指導を行っている。同校でのマナー教育と、社会人基礎力の育成について伺った。

### 国際化に対応できる人、 地域に貢献できる人を目指す

新潟商業高等学校は明治16(1883)年創立、全国的に見ても長い歴史を持つ伝統校だ。英語と異文化を中心に学ぶ国際教養科と、商業系の総合ビジネス科・情報処理科の3学科からなり、全校で約1000名の生徒が在籍。部活動も盛んで、運動部を中心に多くの部が全国大会・北信越大会に出場し、成績を残している。同校の生徒の印象について、太田恭利校長は次のように語る。

「基本の力をしっかりと備えている生徒が多いですね。つまり、自分で目的を見つけ出し、それに向かって一層努力することができるので、日ごろ生徒と接する機会はそれほどありません。

せんが、面接指導などで個々に対面すると、より一層その印象は強くなります」。

地元では「就職に強い」というイメージで知られる同校だが、生徒の8割が四年制大学や短期大学、専門学校に進学し、就職は約2割と少ない。そのほとんどが地元の企業や公的団体などに就職している。就業観やビジネスの意識が備わっているのは、やはり総合ビジネス科・情報処理科の生徒たちだ。徳永和教頭は、同校で育成したい人材像をこう説明する。

「一つは国際化に対応できる人材、もう一つは地域に貢献できる人材です。そのために3学科でそれぞれ英語、会計、情報処理を基礎としたコミュニケーション力を付けてもらいたいと思っています。また簿記や情報処理といった商業系の資格も重視しており、秘書検定もその中の一つとして位置付けています」。

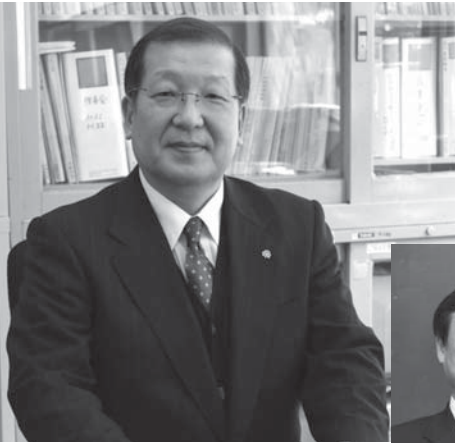
### 秘書検定で基本的な マナーを身に付ける

川上浩信先生は5年前から、鶴間陽子先生は3年前から、秘書検定の指導を担当している。「課題研究」の一選択科目として開講しているが、毎年80名近くの生徒が選択するそうだ。「特に就職希望の生徒に勧めています。就職はまだ先でも、いざれ必要だからマナーを勉強したいという生徒も多いです。男子は毎年10名程度ですが、皆、興味を持って取り組んでいます」と川上先生。

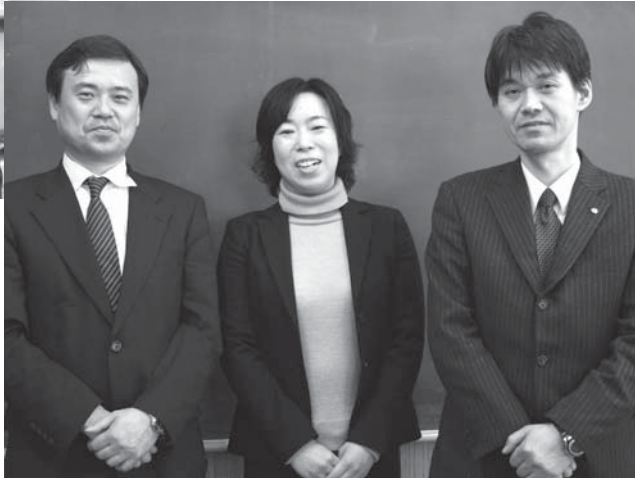


新潟商業高等学校校舎

太田恭利校長



左から川上浩信先生、  
鶴間陽子先生、  
徳永和教頭



マナーに絞ってしっかりと学べる科目は秘書検定だけだ。授業では、6月に3級、11月に2級の検定受験を目指しており、『クイックマスター』『実問題集』を使って分野ごとに学習を進める。生徒たちが弱い部分は、やはり言葉遣いだと鶴間先生は言う。

「部活動が盛んなこともあり、日ごろから上下関係を強く意識しているため、敬語を使おうと

いう意識は多くの生徒が持っています。でも正確に理解していないのか、二重敬語になったり尊敬語と謙譲語を間違えていたりといったことがよくあります」。

検定試験の終わった12月以降は、電話応対や来客応対、名刺交換などの実技（ロールプレイング）が中心。ビジネスの実際の場面を想像しながら、生徒たちは積極的に取り組んでいるそうだ。最後に、冠婚葬祭のマナーについてビデオを見て終了である。

総合ビジネス科3年生の川村美欧さん、佐藤夏野子さんは、就職を見越して「課題研究」で秘書検定を選択した。それぞれ地元のア、健康保険組合への就職が決まっている。いずれも事務職での採用だ。

入学以前から高校卒業後に就職することを決めていた川村さんは、選択の理由を「秘書検定では事務職の仕事について学ぶことができるし、他の科目では教わらないビジネスマナーについても勉強できます。マナーはどんな企業に就職しても必要なので、しっかりと学んでおきたかったです」と話す。川村さんは3級は受けずに、6月に2級にチャレンジして合格した。

「2級では状況をよく考える必要があり、実際の現場に即している分、想像できない場面も多かったです。過去問題を数多く解くことで、少しそれに触られたのがよかったです」と、少簿記を学ぶうちにその面白さに気付き、事務職への就職を決めた佐藤さんは、「社会に出る

には、自分にはまだまだ身に付いていないことがたくさんあると思いました」と振り返る。

「3級は常識で分かることも多かったのですが、2級になると実践的。上司に対する態度、言葉遣いが具体的で、例えば、社内では『〇〇課長』と呼ぶけれど、外の人と話すときには自分の上司でも役職や敬称を付けないとか、実際の応対が分かって勉強になりました」。

電話応対や来客応対、名刺交換などの実技では、応対の流れは理解できても、実際に自然に言葉を発することの難しさを感じたという二人。繰り返し練習することで「できる！」と自信が付いたそうだ。

「入職前の説明会では周りは大学生ばかり。私だけ年下で気後れしていたのですが、大学生が職員の方に『ご苦労さまです』と言ったのを聞いてはっとしました。この場合は『お疲れさま』。私だっけしっかりと学んできたから大丈夫、負けないと思えました」（川村さん）。



左から3年生の佐藤夏野子さん、川村美欧さん



「日常ですぐに使えることはまだ多くありませんが、母が弔問に行く時、上書きで迷っていたので『この場合は御霊前だよ』と教えてあげました。身に付いているな、と思っただけでした。これからは2級で勉強したことが当たり前にできるように、学んだこと全てを生かして働いていきたいです」(佐藤さん)。

生徒たちの話を聞きながら、先生方はその成長ぶりに目を見張る。「検定に合格するだけでは意味がありません。学んだことが自然に言動に表れるくらいになってほしい」といつも思っています。二人はしっかりと身に付けてくれているようです」(鶴間先生)。

同校では、高度な資格取得を目標に、県内の専門学校と提携した資格講座を設けており、情報処理の国家資格や簿記の上位級、税理士試験など、高校生には難関の資格にも毎年合格者を出している。秘書検定も、準1級に挑戦できる生徒を増やしていきたいと考えている。

### 学校生活は 基本的な生活習慣を作る場

毎年7月に2年生の就職希望者全員が参加するインターンシップや、春休みに1、2年生の希望者が参加するデュアルシステムは、いずれも2社ほどの地元企業の協力の下に行う職業体験実習である。勤労観の育成を大きな目標とし、仕事も体験するが、あいさつや時間厳守などの基本的なルールの大切さを学ぶ機会でもある。

企業の担当者からは、生徒たちの姿勢は高く評価されている。あいさつがいい、制服をきちんと着ている、熱心に仕事に取り組むなど「社員よりしっかりしている」「こんなにしっかりできるならぜひ採用したい」と言われるほどだ。その背景に日々の取り組みがあることは言うまでもない。例えば、数年前から実施している「制服を美しく着る週間」。年に3回ほど、生徒指導部の教員が正門前で生徒の身だしなみや遅刻のチェックを行っている。

「きっかけは数年前、他県と比較して新潟県の高校生は制服のスカート丈が短いと報道されたこと。県下の高校で身だしなみの改善に取り組むことになったのです。今はその効果が出たせいか、皆、普段からきちんと着ています。身だしなみの大切さは多くの生徒が感じているようです」(鶴間先生)。

あいさつに関しても、近隣地域では「新商の生徒は気持ちいいあいさつをしてくれる」と評判だ。

「部活動が盛んなせいもあるでしょう。転動して来た先生が、廊下で擦れ違う生徒たちが次々にあいさつしてくれるので感激していました。『よき伝統なのでしっかり守っていきましょう』と生徒には話しています」(川上先生)。



就職が決まった3年生を対象に、社会人の心構えを説く社会人準備セミナーを開催

同校でのあらゆる活動を通して、生徒にはビジネスコミュニケーション能力を養ってほしいというのが先生方の願いだ。「特に、基本的な生活習慣をしっかりと身に付けてほしいですね。あいさつやマナー、提出物の期限を守るなどといったことを通じて、社会に出るための準備をしてほしい。もちろん、100パーセント高校で身に付けるのは難しいですが、高校3年間を含む何年かで社会人としての意識を高めてもらいたいと思っています」と徳永教頭。生徒たちへの期待は大きい。



デュアルシステムで職業体験実習を行う生徒たち